

(国語科)

自分の思いや考えをいきいきと表現する子どもを育てる
～物語文教材の学習を通して～

大阪市立味原小学校 研究部

1. 研究主題設定の理由

本校では、『自信をもったたくましい子』を学校教育目標とし、「自分の考えがはっきり言える子（主体的に考え創造する）」「くじけず最後までやりぬく子（成就感を高める）」「みんなとなかよく助け合う子（連帯感を高める）」を目指す子ども像として、日々の教育活動に取り組んでいる。

令和5年度「学力経年調査」でのアンケート「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」の項目では、ほとんどの児童は肯定的回答をしているが、一部、大阪市平均を下回る結果となった学年も見られた。「全国学力・学習状況調査」の国語科では、大阪市平均、全国平均をともに上回っているが、「書くこと」に関しては、少し課題が見られた。このような実態を踏まえて、自分の考えを的確に表現し伝えることができる「書く力」を身に付けていくことが大きな課題であると考ええる。

2. 研究の趣旨

昨年度は、国語科を研究教科として取り上げ、研究主題を「自分の思いや考えをいきいきと表現する子どもを育てる～説明文教材の学習を通して～」と設定して取り組んできた。説明文教材の学習における基礎・基本を定着させ、筆者が何を（主張）どのように（表現方法）伝えようとしているのかを読み取り、自分の思いや考えを「書く」「話す」といった表現活動へとつなげていくようにした。しかし、自分の考えをもとに友達の考えと交流する中で、相違点を見極めて自分の考えを見直し、広げ深めるまでには至っていない。今年度は、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、目的や意図に応じて自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫する力を身に付けるとともに、自分の考えを広めたり深めたりすることができる交流活動を取り入れた授業展開や支援の在り方を工夫していこうと考えている。

そこで、今年度も引き続き国語科を研究教科とし、物語文教材を取り上げて、「自分の思いや考えをいきいきと表現する子どもを育てる～物語文教材の学習を通して～」を研究主題として取り組むこととした。自分の言葉でいきいきと表現する子どもを育てるために、研究の重点（視点）を明確にし実践を重ね研究を進めていくこととした。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点①自分の考えをもち、交流を通して考えを広げ、深める

- 他の友達の思いや考えと比べたり関連付けたりするために、自分の思いや考えを「書く」活動を取り入れる。
- 考えを広げ、深めるために観点を明確に示し、「話す」「聞く」ことを意識させて交流活動を展開する。

課題に対して自分が考えたい問いをもち、それを解決したり、追究したりしていくとともに、文章の叙述をもとに、理由や根拠を明らかにして自分の考えを書くことができるようにする。書くことで自分の考えがまとまり、自信をもって交流に臨むように支援する。

話し合い活動では、互いの思いや考えと比べたり関連付けたりして、考えの違いやよさに気付く

ように、話合いの観点を明確にするなど支援の在り方を創意工夫する。

視点②付けたい力にふさわしい言語活動を設定する

- 単元におけるゴールを明確にする。

その単元で「付けたい力」を明確にし、教材で学んだ力をもとに、読み取りを生かして表現する活動を行う。目的意識や相手意識を明確にし、「おもしろそう」「やってみたい」と考える価値やよさを感じ、意欲的に取り組むことができる言語活動を設定する。

4. 研究の成果と今後の課題

①評価

各物語文の B 基準を設定し、それぞれの児童の変遷を辿り評価を続けた。(右の表は5, 6年生の表)それにより、初め B 基準に満たなかった児童が、できるようになった。また、指導者側も自身の指導内容を振り返り、改善を図る良い目安として活用することができた。さらに、この評価基準は、今後本校の基準となり、来年度の各学年の物語文における評価としても活用が可能である。今後は、物語文教材以外のものにおいても評価基準を作成し、味原小学校独自の評価の目安として活用を図りたい。しかし、この評価基準は一度作って終わるものではなく、その時々児童の実態を見極めて更新されねばならない。評価基準をしっかりと立て、教科指導にあたるということは、国語科のみならず、どの科目においても必要不可欠な指導者の資質能力といえるだろう。また、この評価基準は児童にとってのその学習のめあてともなり、視点を明確にして学習に取り組むことができるようにした。指導者が児童に付けたい力と児童自身が取り組む学習活動がズレることなく授業が進むことにより、児童への指導と評価が一体化した学習を実現させることができた。さらに、1年生から6年生までの系統を意識した指導を行った。今回授業研究として物語文に取り組んだが、各学年の「人物に着目をして読む」教材について、各学年の発達段階に応じた評価基準を設けた。そうすることで、各学年間の系統が明確になり、先の学年を見据えた授業研究となった。課題としては、担任一人で毎単元この作業を行うことは負担も大きく、実現不可能という意見もある。そこで本校では、校務分掌としてデータを分析するチームを作り、各学年の授業終わりに集めた児童のノートをデータに転記することを行った。担任はそれをもとに評価を行う。そうすることで負担も分散され、実現可能な取組として本校では成り立たせることができた。これを、他単元、他教科へと広げるためには、更なる業務改善を図る必要があるだろう。

②言語能力の育成

各学年の発達段階に応じた言語能力の育成を目的とした活動を取り入れた。言葉のまとまりや語彙力を増やす工夫を各学年で行うことにより、子ども達にとって教材を理解するための知識・技能の獲得に大きく寄与できたと考える。低学年などでは、一斉読みなどの音読活動を取り入れることで、言葉のまとまりを意識しながら教材を読むことができるようになった。中学年や高学年では、その教材から読み取れる感情の言葉やその登場人物を表す言葉などを教室に掲示することで、児童は語彙力を高め、教材を深く理解するための支援として役立った。

③個別支援の充実

学習に支援を要する児童に対しては、個別のワークシートや言葉がけなどの働きかけを行い、自分の考えを少しでも書けるように、各学年の実態に応じた手立てを行った。また、学校全体としても、月曜日や水曜日の全学年が5時間授業の日に、放課後学習の時間を設け、学習につまずきのある児童に対しての個別学習を行った。児童は落ち着いて学習に取り組むことができるため、学習の定着を促す良い機会となっている。